

1999年度会長報告

会長この一年

東北大学大学院理学研究科 佐藤 繁

日本放射光学会の会長に選出されたのは昨年の8月だった。晴天の霹靂だった。昨年1月、会長に就任して以来無我夢中で過ごしているうちに、早いもので1年余り経過してしまった。最初に行ったことは、恒例となっている、幹事を選考し就任を依頼するという仕事だった。まず、事務局とともに様々な事項を整理し取りまとめ、議事原案をつくるなどの庶務幹事として東北大の高桑雄二さん、学会の顔となる充実した会誌をつくる編集幹事としては引き続きベテランで実行力の人、東大の尾嶋正治さん、行事幹事は、巨大加速器を広い視野で扱っているSP-8の大熊春夫さん、渉外幹事は日本の中央にいるUVSORの鎌田雅夫さん、会計幹事も引き続き財政改革の実力派、PFの山本樹さんという布陣である。どの方々もお忙しいのは承知の上で、ご無理をお願いしたところ、全員から快諾の返事をいただいて一安心した。学会の立場からみると私事になり恐縮であるが、99年度から偶然にも勤務先で仕事の量が否応無しに増加してしまう立場になった。そのため学会に対して責務が十分果たせるかどうか大いに懸念していた。結果は会長として十分働いたとは言えない、会員の皆様に申しわけのない1年であったが、それでもなんとかやってこれたのは、幹事の皆様と事務局の献身的なご協力のおかげである。心から感謝申し上げる次第である。

さて会長と幹事会は、学会の3つの基本方針、即ち充実した会誌の発行、年会・合同シンポジウムの強化と国際交流の推進、会員数の増加と財政基盤の確立を主として念頭において活動することとした。

先ず懸案の年6回の学会誌の発行は、会員の要望や学会の財政状態などを勘案し、種々検討した結果、今回は見送る事にした。会誌の内容については、SP-8が本格的に稼働を開始し、PFを始めとする諸施設が順調なこともあり、非常に充実している。現在のところ、数号先までの掲載予定原稿が決まっている。お読みになればすぐ気づかれると思うが、会誌には、シリーズ物や興味深いテーマの座談会の記事が載るなど、様々な工夫が凝らされ大変面白い。編集委員会の熱意が伝わってくるような誌面である。また現在、会誌には原著論文を掲載しないことになっているが、学術誌としての在り方も含めて掲載するかどうかについて検討する予定である。

第13回年会・合同シンポジウムは、分子研で開催することとした。組織委員会とプログラム委員会、分子研の緊

密な連携プレーにより、開催準備は順調に進んでいる。関係者のご努力に深く感謝したい。また今回は、会議の構成について、学術研究の発表の場としての緊張感をより高めるため、一般口頭発表の件数を出来るだけ増やすこととした。プログラム委員会では、会議の活性化を図るため、特別講演や企画講演、一般講演のテーマや講演時間、時間帯などを総合的に考慮してプログラム編成を行っている。さらに第14回年会・合同シンポジウムは、広島大学で開催することがほぼ決まっている。これは、広島大にとってもまた本学会及び放射光科学の分野にとっても、これからの可能性と幅をひろげて良い機会をあたえてくれると確信している。快くお引受けいただいた広島大学の皆様に感謝したい。

上坪前会長の時代にすでに着手された財政基盤の強化については、継続していくつかの方策を進めている。まず正会員と賛助会員を増やすことであるが、「会長挨拶」でも現状を述べたように、学会事業の充実を図っていれば自ずと会員は増えるという期待は見事に外れた。世間で言われているように、「学会会員数に於ける1000人の壁」が厳然と存在していることを痛感させられた。勿論、まだまだ学会としての努力が足りないことは十分承知しているが、現段階では、働きかけなければ何事も起こらないと思われる。そこでまず手始めに、年会・合同シンポジウムで、未入会者に対して申込書を配布し、入会を勧誘することの了解を、年末の評議員会でいただいた。この件について、会員の皆様にも、出来る限りのご理解とご協力をお願いしたい。また、年会特別会計の決算を学会一般会計に繰り入れることを骨子にした本会の財政改革は、前会長時代実施されたものであるが、その後の会計幹事と事務局の不断的な努力とフォローにより、合理的な方式として定着しつつある。同時に会費の滞納も、随分減らすことが出来た。

さらには、大学や研究所などの機関に、会誌の購読をよびかけ、新たに6機関に加入していただいた。また、科学研究費等についても、機会がある限り応募していくことは勿論のことである。他に、外部機関から提供を求められることの多い会員名簿の提供の方法について、評議員会申し合わせを新たに作成した。

今年の第4回若手奨励賞募集には3名の応募があった。昨年10月14日選考委員会を開催して厳正に審査をおこない、表面科学と原子物理学の分野で優れた研究業績をあげた2名の若手研究者を表彰することとした。次回も多数

の応募を期待したい。

昨年6月28日、日本学術会議において、物理学研究連絡委員会学協会懇談会がひらかれた。会長と渉外幹事が出席し、学術会議や研連の現状や科研費審査委員の選考などについて意見交換した。本学会はまた学術会議会員の選出に係る学術研究団体に登録されている。他学協会との連携をより強めていくことが必要であると考えている。

一昨年8月上旬前会長から文部大臣宛に提出していた「真空紫外・軟X線放射光施設整備に関する要望

書」のその後として、昨年1月「真空紫外・軟X線領域第3世代高輝度放射光源に関する検討会」を開いた。この件は、現在も流動的に推移している。

以上1999年度の経過を大まかに報告致しました。少しは、様子がわかってきたので、残りの1年を一生懸命頑張りたいと思います。会員の皆様からの、厳しく建設的なご意見と、忌憚のないご指摘をいただいて、学会のため前進していく積もりです。

1999年度幹事報告

庶務幹事のこの一年

東北大学科学計測研究所 高桑 雄二

佐藤会長から庶務幹事の依頼の電話を受けたときには、学会の仕事をよく理解しておらず、うまくこなせるか不安なままに引き受けてしまいました。当初の心配とは別にこの一年間の庶務幹事の仕事を滞りなく過ごすことができました。これもひとえに佐藤会長の御指導の下、学会事務局の多大なサポートと各幹事の方々の御協力のおかげと感謝する次第です。

日本放射光学会も1998年に創立10周年を迎え、本年度は第二段階の活動に入った時期にあたりました。この10年間で学会活動の多くの点について経験が積み重ねられ、過去の事例を参考にすることで庶務幹事の仕事をこなせることが多くあります。このことは他の幹事の方の仕事についても当てはまるのではないかと思います。このように学会活動は大きな問題もなく運営されているのですが、次の10年の展開を考えたとき、一つの曲がりかどにさしかかっているのではないかと思います。その理由は学会活動の基礎となる会員数について、最近ほぼ1000人前後で止まったままであり、とりわけ学生の会員が全体の10%以下の50-70人しかいないからです。ここ数年でSPRING-8の大型放射光リングをはじめ広島大学や立命館大学などの小型放射光源が建設されていることを考えると、それに見合っ

て会員数の増加を図るためには学会活動をいろんな点で見直しなが

ら進めていかなければならないのではないかと思います。庶務幹事としては会員の方々からの忌憚のない御意見をお寄せいただいて、来年度の活動に反映させていきたいと考えています。今年一年を具体的に振り返ってみますと、やはり第三世代の高輝度光源の計画をめぐる動きが活発にあり、学会としてどう対応すべきかを考えさせられた大きな問題であったと思います。私個人としては、基本的には放射光学会が個別の問題の利害の判断や、計画を取り上げるのではなく、放射光をキーワードとした学問分野の発展のために、個別の利害を離れて対応していくことが困難ではあるが、必要と考えています。私も程度の差はあれ、それぞれの計画に関心を持っているため、立場を切り替えて考えなければいつも反省させられます。

前幹事の坂井先生から仕事の引き継ぎを受けるまで、庶務幹事が何であるかも知らずにこの一年間が始ったのですが、庶務幹事の仕事が調整・連絡の担当であることが分かってきました。これはインターネットで言えばサーバーのようなものなので、あまり出過ぎないようにして情報の交通整理に当たり、円滑な学会活動の推進を図りたいと思います。